23　「」─中世の歴史物語

21年度　早稲田大学

★　次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

　この入道殿の御弟に、そのころ右大臣実雄と聞ゆる、姫君あまた持ち給へる中に、すぐれたるをらうたきものに思しかしづく。今上にいで給ふべきを、やがてそのついで、文応元年入内あるべく思しおきてたり。院にも御気色たまはり給ふ。入道殿の御孫の姫君も参り給ふべき聞えはあれど、さしもやはとおしたち給ふ。いとたけき御心なるべし。

　この姫君の御兄あまたものし給ふ中のこのかみにて、中納言公宗と聞ゆる、いかなる御心かありけん、下たくけぶりにくゆりわび給ふぞ、いとほしかりける。１さるは、いとあるまじきことと思ひはなつにしも、したがはぬ心の苦しさ、おきふし、葦のねなきがちにて、御いそぎの近づくにつけても、我かの気色にてのみほれ過ぐし給ふを、大臣は又いかさまにかと苦しう思す。

　初秋風けしきだちて、艶ある夕暮に、大臣渡り給ひて見給へば、姫君、薄色に女郎花などひき重ねて、几帳に少しはづれてゐ給へるさまかたち、常よりもいふよしなくあてに匂ひみちて、らうたく見え給ふ。御髪いとこちたく、五重の扇とかやを広げたらんさまして、少し色なる方にぞ見え給へど、筋こまやかに額より裾までまよふすぢなく美し。ただ人にはａげに惜しかりぬべき人がらにぞおはする。

　几帳おしやりて、わざとなく拍子うちならして、御琴ひかせｂ奉りｃ給ふ。折しも中納言参り給へり。「こち」とのたまへば、うちかしこまりて、御簾の内にさぶらひｄ給ふさまかたち、この君しもぞ又いとめでたく、あくまでしめやかに心の底のゆかしう、そぞろに心づかひせらるるやうにて、こまやかになまめかしう、すみたるさまして、あてに美し。いとどもてしづめて、２騒ぐ御胸を念じつつ、用意を加へ給へり。

　笛少し吹きならし給へば、雲ゐにすみのぼりて、いとおもしろし。御琴の音ほのかにらうたげなる、かきあはせの程、なかなか聞きもとめられず、涙うきぬべきを、３つれなくもてなし給ふ。撫子の露もさながらきらめきたるに、御髪はこぼれかかりて、少し傾きかかり給へるかたはら目、まめやかに光を放つとはかかるをや、と見え給ふ。４よろしきをだに、人の親はいかがは見なす。ましてかくたぐひなき御有様どもなめれば、よにしらぬ心の闇にまどひ給ふも、ことわりなるべし。

　十月二十二日参り給ふ儀式、これもいとめでたし十両、一の車左は大宮殿、二位中将基輔の女とぞ聞えし。二の左は春日、三位中将実平の女。右は新大納言、この新大納言は為家の女とかや聞えし。それよりも下、ましてくだくだしければむつかし。御雑仕、青柳・梅が枝・高砂・貫川といひし、この貫川を、御門忍びて御覧じて、姫宮一所出でものし給ひき。その姫宮は、末に近衛関白家基の北の政所になり給ひにき。よろづのことよりも、女御の御様かたちのめでたくおはしませば、上も思ほしつきにたり。女は十六にぞなり給ふ。御門は十二の御年なれど、いとおとなしくおよすけ給へれば、めやすき御ほどなりけり。かの下くゆる心ちにも、いと嬉しきものから、心は心として、胸のみ苦しさまされば、５忍びはつべき心ちし給はぬぞ、つひにいかになり給はんと、いとほしき。程なく后立ちありしかば、大臣心ゆきて思さるること限りなし。

（注１）天皇にまだ女御のいない場合、臨時に選ばれて大嘗会のに奉仕する女官。

（注２）女房たちが簾の下から衣の袖口や裾を出して乗っている車。

問１　傍線部１「さるは」の指す内容として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　右大臣実雄が、娘ではなく、あえて入道殿の孫の姫君を女御に立てた猛々しい心。

ロ　右大臣実雄が、入道殿の気持ちを知りながら、あえて娘を女御に立てた猛々しい心。

ハ　右大臣実雄が、院の気持ちを知りながら、あえて娘を女御に立てた猛々しい心。

ニ　中納言公宗が、父の意に反して、入道殿の孫の姫君を恋い慕う心。

ホ　中納言公宗が、自分の妹である姫君をひそかに恋い慕う心。

問２　傍線部ａ「げに惜しかりぬべき」の品詞の構成として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　接続詞・形容詞・助動詞・助動詞・助動詞

ロ　副詞・助詞・動詞・助動詞・助動詞

ハ　感嘆詞・助詞・動詞・助動詞・助動詞

ニ　接続詞・形容詞・動詞・助動詞・助動詞

ホ　副詞・形容詞・助動詞・助動詞

問３　傍線部ｂ「奉り」、傍線部ｃ「給ふ」、傍線部ｄ「給ふ」の敬意の対象として最も適切なものをそれぞれ次の中から一つ選べ（同一のものを選択してもよい）。

イ　入道殿　　　　ロ　入道殿の孫の姫君

ハ　右大臣実雄　　ニ　中納言公宗

ホ　右大臣実雄の姫君

ｂ＝〔　　　〕　　ｃ＝〔　　　〕　　ｄ＝〔　　　〕

問４　傍線部２「騒ぐ御胸を念じつつ、用意を加へ給へり」の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　心の動揺を抑えて、入内の準備を進められた。

ロ　心の動揺を抑えて、姫君と合奏するための支度をされた。

ハ　心の動揺を抑えて、気持ちが外に表れないように用心された。

ニ　胸騒ぎが鎮まることを願い、入内後には幸福を得るようにと願われた。

ホ　胸騒ぎが鎮まることを願い、素晴らしい入内の儀式となるよう指示をされた。

問５　傍線部３「つれなくもてなし給ふ」、５「忍びはつべき心ちし給はぬ」の主語として最も適切なものをそれぞれ次の中から一つ選べ（同一のものを選択してもよい）。

イ　帝　　　　　　ロ　姫宮　　ハ　右大臣実雄

ニ　中納言公宗　　ホ　右大臣実雄の姫君

３＝〔　　　〕　　５＝〔　　　〕

問６　傍線部４「よろしきをだに、人の親はいかがは見なす」の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　世間並みの娘でさえ、親はよい方だと思いがちである。

ロ　良家の娘でさえ、親は将来の心配が絶えないものである。

ハ　良家の娘でさえ、他人の親からあら捜しをされるものである。

ニ　性格のよい娘でさえ、親はその美しさをも気に掛けるのである。

ホ　世間並みの娘でさえ、他人の親から見ればうらやましいのである。

◎問７　本文の内容と合致するものを次の中から一つ選べ。

イ　右大臣実雄の姫君は、帝よりも年上で、帝にはほかに好きな女性もいたので、二人の仲はよくなかった。

ロ　右大臣実雄の姫君は、中納言公宗の心中を察していたが、父の命であるのでどうしようもなかった。

ハ　右大臣実雄の姫君は、ほかの女性たちと争って女御となることに、強い不安を抱いていた。

ニ　右大臣実雄は、中納言公宗の悩む様子を垣間見て、どうしたものかと憂いていた。

ホ　右大臣実雄は、姫君が実は中納言公宗に好意を持っていることを知っていた。

【解答】

問１　ホ

問２　ホ

問３　ｂ＝ホ　ｃ＝ハ　ｄ＝ニ

問４　ハ

問５　３＝ニ　　５＝ニ

問６　イ

問７　ニ

【現代語訳】

　この入道殿の弟君で、その頃右大臣実雄と申し上げる（方が）、姫君をたくさん持っていらっしゃる（その）中でも、（容貌が）優れている（姫君）をかわいいものとして大切にお育てになる。今上天皇の女御代として出仕なさるはずで、そのままその機会に、文応元年に入内するはずと心づもりなさっていた。院からも（了解の）ご意向をいただきなさる。入道殿の孫の姫君も入内なさるはずだといううわさはあるが、そういうことがあるだろうか、いやあるまいと敢行なさる。とても強いお心なのであろう。

　この姫君の兄君たちがたくさんいらっしゃる（その）中の一番上の兄君で、中納言公宗と申し上げる（方は）、どういう心がおありだったのだろうか、下でくすぶる煙（のよう）に（密かに妹君を）思い焦がれて悩んでいらっしゃるのは、お気の毒だった。それというのは、まったくあってはいけないことだと思い切ろうとしても、そうはいかない心の苦しさで、寝ても起きても、（葦の根の「ね」ではないが、）声（=）を出して泣くことが多く、（妹君の入内の）ご支度が近づくにつけても、自失の様子でぼんやり過ごすばかりでいらっしゃるので、（父の）大臣はまたどういうことだろうかと心配していらっしゃる。

　初秋の風が吹き始め秋めいてきて、風情がある夕暮れに、大臣が（姫君のところへ）いらっしゃってご覧になると、姫君は、薄色の着物に女郎花（ね）の着物を重ねて、几帳から少し外れて座っていらっしゃる姿や顔立ちが、いつもよりも言いようもなく上品で美しさがあふれ、かわいらしく見えなさる。御髪もとてもたっぷりとしていて、五重の扇とかいうものを広げたような様子で、少し赤っぽく見えなさるが、毛筋がこまやかで額から先端までまっすぐで美しい。普通の人（の妻）としては実に惜しいに違いない人柄でいらっしゃる。

　（大臣は）几帳を（脇に）押しやって、わざとらしくなく（で）拍子をとって、（姫君に）琴を弾かせ申し上げなさる。ちょうどそのとき中納言が参上なさった。（大臣が）「こちらへ（いらっしゃい）」とおっしゃるので、（中納言は）恐縮して、御簾の中に控えなさる姿や顔立ちは、この君もまたすばらしく、あくまでも落ち着いて物静か（なの）で心の中を知りたく（思うほどで）、何となく自然と気を遣ってしまうようで、端麗で優雅で、澄んだ様子で、上品で美しい。（中納言は）より一層心を静めて、心の動揺を抑えて、気持ちが外に表れないように用心された。

　（中納言が）少し笛を吹いて（音を）鳴らしなさると、（その音は）雲の方まで澄んで上っていき、とても趣がある。（姫君の）琴の音はほのかでかわいらしく、合奏なさるとき、（中納言はその音色を）かえって聞き取ることができず、涙がにじんでしまいそうになるが、何事もないように振る舞っていらっしゃる。撫子にかかる露そのままにきらきら輝く小袿に、御髪がこぼれかかり、少し前かがみになっていらっしゃるのを横から見た（姫君の）お姿は、本当に光を放つとはこういうこと（をいうのだろう）か、と思わずご覧になる。世間並みの娘でさえ、親はよい方だと思いがちである。ましてこのように類のない（美しい）お姿であるようなので、（大臣は）世に例をみない親心の闇にお迷いになるのも、当然のことなのであろう。

　旧暦十月二十二日（姫君が）入内なさる儀式は、これもとても素晴らしい。出車は十両で、一の車の左（側に乗るの）は大宮殿で、二位中将基輔の娘だとうわさに聞いた。二の車の左（側に乗るの）は春日で、三位中将実平の娘（である）。右（側）は新大納言で、この新大納言は為家の娘とかいうことだと聞こえてきた。それよりも下（の人たちを列挙するの）は、まして繁雑なので面倒である。雑用係の女官は、青柳・梅が枝・高砂・貫川といったが、この貫川を、帝がこっそり寵愛なさって、姫宮お一人がお生まれになった。その姫宮は、後に近衛関白家基の正妻におなりになった。どんなことよりも、女御のお姿顔立ちが美しくていらっしゃるので、帝も心惹かれなさった。女御は十六歳におなりである。帝は十二歳というお歳だが、とても大人びて成長していらっしゃったので、感じのよい（お似合いの）お二人であった。あの（女御を慕っている中納言の）密かなお気持ちも、（妹が寵愛されて）とても嬉しいものの、心は別で、胸の中に苦しさが募るので、（妹への恋心を）抑え切れそうにないお心が、結局どうなってしまわれるのだろうと、お気の毒だ。ほどなくして立后の儀式があったので、大臣は満足にお思いになることこの上なかった。